



字幕落語流コミュニケーション

桂小春團治 Katsura Koharudanji

国内をはじめ、海外でも落語をする機会がありますが、当然のことながら海外では、ことばの壁をどう越えたらよいかという問題にあたります。いろいろな考え方があると思いますが、私は、公演する国のことばを話すのではなく、字幕を使うことにしています。一つには、本場の落語そのものを伝えたいという思いがあるからです。上方落語を大阪弁のリズムや抑揚なども含めて肌で感じてもらいたい。落語そのものを、雰囲気も含めて一つの文化として伝えたい。我々も、洋画を見るときに、ことばはわからなくても、字幕があれば笑ったり泣いたりできる。映画のできるのであれば、落語でもできるのではないか。字幕を読むという形で向こうからも歩み寄ってもらおう。そう考えたのです。

ことばのほかにも問題はあります。日本なら、落語を生で見たことがない方でも、着物を着て座って話すなど、落語に対する漠然としたイメージがありますが、海外の方は、往々にして落語を見たことも聞いたこともありません。また、日本の古典芸能といえば、様式美としての美しさを持つ能や歌舞伎という形で知られ、日本人といえば、グレーや紺のスーツを着て、仕事をきっちりし、冗談ひとつ言わないイメージを持たれています。「落語」は、(真面目な)日本人による comedy であり、(様式美であるはずの)日本の古典芸能であるらしい。そのようなもので本当に楽しめるのかと、見に来る方は半信半疑です。芝居のように見えるけれども舞台装置は一切使わず、一人で何人もの人物を演じ分け、扇子や手ぬぐいをいろいろなものに見立ててイメージを広げていく落語のような comedy は、全く想像もつかないのです。想像もつかない芸能に興味を持って足を運んでくれただけでもありがたいといえます。

そこで、落語の本題に入る前には、落語の基本的な約束事、例えば、右を向いて次に左を向くと違う人物に変わっています、扇子が筆になったり、手ぬぐいを丸めるとお芋になったりしますといったことを、笑いを交えながら伝えるようにしています。また、上方落語には三味線と太鼓などの鳴り物が入るので、本格的なものを見せるために、必ず連れて行って生で聞いてもらいます。その際、親近感を持ってもらうために、古典的な出囃子のほかにも「ご当地ソング」を出囃子にアレンジして演奏します。イギリスでは、The Beatles の “Yellow Submarine” などを演奏するのですが、曲紹介のときに字幕を映すスクリーン上で、曲名を “Yerrow Submarine” とわざと間違え、日本人にとって難しい l と r の区別を逆手にとって笑いを誘う工夫などもします。実は、こういった解説をしているとき、私はまだ舞台上に上がっていません。このような導入をするのは、いきなり私が出ていって落語を始め、字幕を目で追ってもらうのではなく、笑いを入れながら、自然に字幕とフレンドリーな関係をつくってもらうねらいもあるからです。

海外公演をするにあたって、お客さんとの隙間をうめるために、いろいろな工夫をして「字幕落語」をエンターテインメントの一つとして作りあげてきました。今後もこのような形で多くの人に落語を伝えられたらと思っています。

かつら こはるだんじ

昭和33年生。落語家。平成11年に三代目桂小春團治を襲名。NPO法人「国際落語振興会」理事長。平成18年、文化庁文化交流使。海外では独自の字幕形式を使い、平成12年のエジンバラ・フェスティバルをはじめ、ニューヨーク国連本部やカーネギーホール公演など、これまででのべ10数カ国で公演。出囃子は、小春團治囃子・栗餅。